

「心のバリアフリー」ハンドブック

～みんなが、生き活きと輝いて暮らせる、バリアのないまちへ～

平成 29 年 2 月



はじめに

皆さんは「心のバリアフリー」という言葉を聞いたことがありますか？ 段差をなくしたり、エレベーターを設置したりするハード面のバリアフリー化については、各施設や道路等において整備が進んでいるところです。しかし、それだけではバリアフリー化社会は実現しません。国が定める移動等円滑化の促進に関する基本方針にも、ハード整備だけでなく、バリアフリー化施設を利用する人による配慮や、高齢者、障害者等の移動等に手助けするなどの支援が重要であり、国民の責務であると明記されています。

堺市では、このような認識（心のバリアフリー）を広く知っていただくため、このハンドブックを作成しました。今後、このハンドブックを活用し、市民や施設管理者の皆さんと連携を図りながら、障害者や高齢者をはじめとした、さまざまな人に対する「心のバリアフリー」を推進してまいります。皆さんのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

「心のバリアフリー」ってなに？

バリアフリーの「バリア」とは、英語で障壁（かべ）という意味です。つまり、バリアフリーとは、人々が行動するときの「障壁（バリア）をなくす（フリーにする）」ことを意味します。

私たちのまわりにはさまざまなバリアが存在します。「バリアフリー社会」を実現するためには、以下の4つの「バリア」を取り除くことが必要と言われています。

○物理的なバリア

出入口や通路に段差があったり、幅が狭かったりすると、車いすの人などは利用できません。

○制度的なバリア

障害があることで資格が取れなかったり、入学や就職の試験が受けられなかったりすると、自分が思うような自由な活動ができません。

○文化・情報面のバリア

目の不自由な人には点字や音声案内、耳の不自由な人には手話通訳や文字情報などがないと、必要な情報が伝わりません。

○意識上のバリア

障害があることを偏見の目で見たり、「かわいそう」と特別扱いしたりすると、対等な交流ができません。

特に、最後に掲げている意識上のバリアは「心のバリア」として、偏見や差別、哀れみや同情といった障害者観を伴ってしまう場合があります。

障害者や高齢者への理解や配慮、声かけを身構えて行うのではなく、ごく自然に行うことができるよう、私たち一人ひとりが相手の気持ちになって考え、お互いを理解し合い、支え合っていくことが大切です。

この4つのバリアを取り除くために、皆さんとともに「心のバリアフリー」を実現していきましょう。

「心のバリアフリー」を取り巻く状況

堺市ではこれまでから、建築物の段差解消や車いす用トイレの整備、鉄道駅におけるエレベーターの整備などの取り組みを進めており、平成13年度から平成15年度にかけて、堺市交通バリアフリー基本構想を策定しました。そのなかで、17駅15地区を重点整備地区と定め、整備目標時期を平成22年として、積極的にバリアフリー化を進めてきたところです。

平成18年12月には「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律（バリアフリー新法）」が施行され、「心のバリアフリー」を深めていくことを国の責務として定めるとともに、国民の責務としても新たに位置づけられました。また、地方公共団体においても、国の施策に準じて、移動等円滑化を促進するために必要な措置を講ずるよう努めることになりました。

このバリアフリー新法の趣旨を踏まえ、平成28年3月に「堺市バリアフリー基本構想」を新たに策定しました。この構想においては、榑・美木多駅周辺地区及び津久野駅周辺地区を重点整備地区として選定し、平成32年を整備目標時期として、バリアフリーのまちづくりを進めていくこととしています。加えて、「心のバリアフリー」を推進していくことを明らかにしました。

また、平成28年4月には「障害を理由とする差別の解消の促進に関する法律（障害者差別解消法）」が施行されました。この法律ではすべての人に対して、障害を理由とする不当な差別的取扱いの禁止及び社会的障壁の除去の実施について必要かつ合理的な配慮の提供を求めています。

バリアを取り除くためには、障害者や高齢者が円滑に移動し、施設を利用できるようにするといった施設面のハード整備だけでなく、障害のあるなしに関わらず、すべての人がお互いの人格と個性を尊重し合いながら、自立した日常生活や社会生活を営むことができる共生社会にしていける必要があります。

「ユニバーサルデザイン」とは？

ユニバーサルデザインとは、「すべての人のためのデザイン」という意味です。「バリアフリー」の考え方をさらに進め、年齢や性別、体力や障害のあるなしに関わらず、すべての人にとって暮らしやすいように、建物やまちの空間、身の回りのものなどをはじめから使いやすくデザインする、という考え方です。広い意味では、ユニバーサルデザインにバリアフリーが含まれる場合もあります。

ご存じですか？

まちで見かけるバリアフリーマーク

駅や公共施設など、まちの中で障害者や高齢者などが安心して利用できるようバリアフリー対応の施設・設備があります。視覚障害者誘導用ブロック、障害者等用駐車スペース、多機能トイレなどです。また、皆さんのまわりには、障害者のための国際シンボルマークなどバリアフリーに関するマークが数多くあります。まちでこのようなマークを見かけたときは、お手伝いをするなどの配慮をお願いします。

○障害者のための国際シンボルマーク



障害者が利用できる建物、施設であることを明確に表すための世界共通のシンボルマークです。マークの使用については国際リハビリテーション協会の「使用指針」により定められています。

駐車場などでこのマークを見かけた場合には、障害者の利用への配慮について、ご理解、ご協力をお願いします。

なお、このマークは、「すべての障害者を対象」としたものです。特に車椅子を利用する障害者を限定し、使用されるものではありません。

○身体障害者標識（障害者マーク）



肢体不自由であることを理由に免許に条件を付されている人が運転する車に表示するマークで、マークの表示については、努力義務となっています。危険防止のためやむを得ない場合を除き、このマークをつけた車に幅寄せや割り込みを行った運転者は、道路交通法の規定により罰せられます。

○聴覚障害者標識



聴覚障害であることを理由に免許に条件を付されている人が運転する車に表示するマークで、マークの表示については、義務となっています。危険防止のためやむを得ない場合を除き、このマークをつけた車に幅寄せや割り込みを行った運転者は、道路交通法の規定により罰せられます。

○盲人のための国際シンボルマーク



世界盲人会連合で1984年に制定された盲人のための世界共通のマークです。視覚障害者の安全やバリアフリーに考慮された建物、設備、機器などに付けられています。信号機や国際点字郵便物・書籍などで身近に見かけるマークです。

このマークを見かけた場合には、視覚障害者の利用への配慮について、ご理解、ご協力をお願いします。

○耳マーク



聞こえが不自由なことを表す、国内で使用されているマークです。聴覚障害の方は、外見では分からないために、誤解されたり、不利益をこうむったり、社会生活上で不安が少なくありません。

このマークを提示された場合は、相手が「聞こえない」ことを理解し、コミュニケーションの方法への配慮についてご協力をお願いします。

なお、新たに「手話マーク」、「筆談マーク」が策定され、普及が図られているところです（16 ページ参照）。

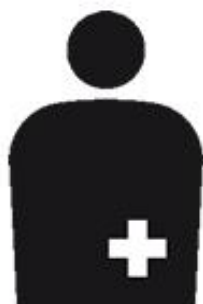
○ほじょ犬マーク



身体障害者補助犬同伴の啓発のためのマークです。身体障害者補助犬とは、盲導犬、介助犬、聴導犬のことを言います。「身体障害者補助犬法」が施行され、現在では公共の施設や交通機関はもちろん、デパートやスーパー、ホテル、レストランなどの民間施設でも身体障害者補助犬が同伴できるようになりました。補助犬はペットではありません。体の不自由な人の、体の一部となって働いています。社会のマナーもきちんと訓練され、衛生面でもきちんと管理されています。

お店の入口などでこのマークを見かけたり、補助犬を連れている方を見かけたりした場合は、ご理解・ご協力をお願いします。

○オストメイトマーク



人工肛門・人工膀胱を造設している方（オストメイト）のための設備があることを表しています。オストメイト対応のトイレの入口・案内誘導プレートに表示されています。

このマークを見かけた場合には、そのトイレがオストメイトに配慮されたトイレであることについて、ご理解、ご協力をお願いします。

○ハートプラスマーク



内部障害・内臓疾患を示すマークとして作られました。心臓機能、腎臓機能、呼吸器機能、ぼうこう・直腸の機能、小腸機能、免疫機能、肝臓機能の障害やその他多くの内臓機能疾患がある方は外見から分かりにくいいため、さまざまな誤解を受けることがあります。

これらの人々の中には、電車などの優先席に座りたい、近辺での携帯電話使用を控えてほしい、障害者用駐車スペースに停めたい、といったことを希望していることがあります。

このマークを着用されている人を見かけた場合には、内部障害への配慮についてご理解、ご協力をお願いします。

○障害者雇用支援マーク



障害者の在宅就労支援、障害者の就労支援を認めた企業・団体に対して公益財団法人ソーシャルサービス協会が付与する認証マークです。

障害者雇用を促進したいという思いを持っている企業は少なくありませんが、そういった企業がどこにあるのか、就労を希望する障害のある人に少しでもわかりやすくなれば、障害者の就労を取り巻く環境がより整備されるのではないのでしょうか。

このマークが企業側と障害者の橋渡しになればと考えています。ご協力をお願いします。

○「白杖SOSシグナル」普及啓発シンボルマーク



白杖を頭上50cm程度に掲げてSOSのシグナルを示しているのは、視覚に障害のある人を見かけたら、進んで声をかけて支援しようという「白杖SOSシグナル」運動の普及啓発シンボルマークです。白杖によるSOSのシグナルを見かけたら、進んで声をかけ、困っていることなどを聞き、サポートをしてください。

※駅のホームや路上などで視覚に障害のある人が危険に遭遇しそうな場合は、白杖によりSOSのシグナルを示していなくても、声をかけてサポートをしてください。

○ヘルプマーク



義足や人工関節を使用している、内部障害や難病がある、妊娠初期であるなど、外見から分からなくても援助や配慮を必要としている人が、周囲の人に配慮を必要としていることを知らせることで、援助を得やすくなるよう、東京都が作成したマークです。

ヘルプマークを身に着けた人を見かけた場合は、電車・バス内で席をゆずる、困っているようであれば声をかける等、思いやりのある行動をお願いします。

人にやさしいまちづくり

バリアフリー施設・設備を見てみよう

車いす使用者用駐車スペース

公共施設や店舗などの駐車場には、障害者のための国際シンボルマーク（4 ページ）の表示がされている駐車区画があります。この区画は一般の駐車スペース（幅 250cm ほど）よりも広い 350cm 以上を確保することで、車いす使用者が自動車へ容易に乗降できるようになっています。また、車いす使用者の移動に配慮して建物の出入口近くに設けることになっています。

加えて、車いす使用者以外の障害者、難病患者、高齢者、妊産婦など移動に配慮が必要な利用者に配慮した「ゆずりあい駐車区画」の両方を整備している施設もあります。



建物出入口に近いという理由だけで、車いす使用者用駐車スペースに駐車していませんか？



利用する必要のない人が、車いす使用者用駐車スペースに車を停めてしまうと、車いす使用者など本来必要としている人がその区画を使えません。

車いす使用者用駐車スペースは、他の一般区画が満車状態であっても、必要な方のために空けておかねばなりません。「少しの間だから」「空いているから」などの理由でこの区画には停めないでください。

【参考】大阪府障がい者等用駐車区画利用証制度

公共施設や商業施設などにおいて、出入口近くに設けられた幅の広い「車いす使用者用駐車区画」を一般の人が利用し、真に必要とする人が利用できなくなる事例が見受けられることから、大阪府としては、「車いす使用者用駐車区画」と、車いす使用者以外の移動に配慮が必要な方のための駐車スペース（「ゆずりあい駐車区画」）の両方を整備する「ダブルスペース」の取組を進めるとともに、障害者や高齢者など移動に配慮を要する方々が安心して外出できるよう、公共施設や商業施設などにおける車いす使用者用の駐車区画等をご利用いただくための利用証を大阪府が交付しています。

本制度は、これらの取組により、ダブルスペース区画に駐車できる対象者を明確にし、不適正な駐車の新なる抑制をめざすものです。

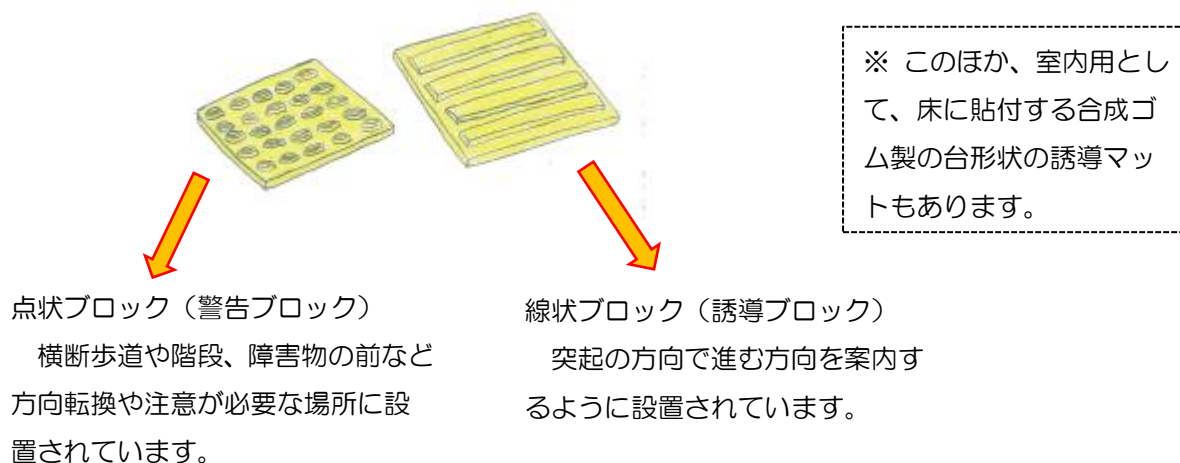


問い合わせ先

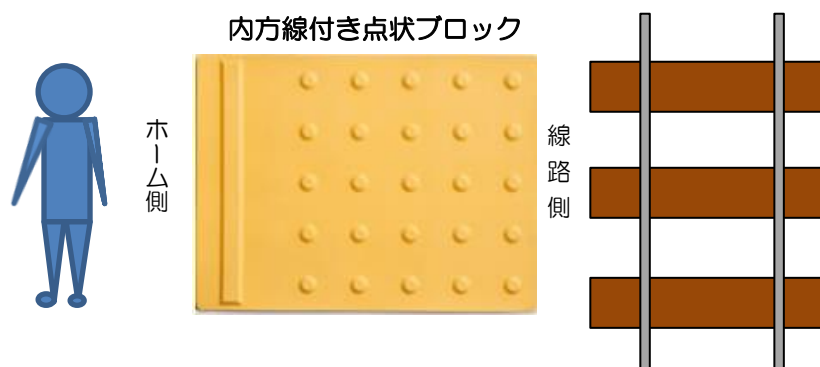
大阪府福祉部障がい福祉室
障がい福祉企画課企画グループ
電話 06-6944-2362
FAX 06-6942-7215

視覚障害者誘導ブロック（点字ブロック）

視覚障害者が安全に移動するためのもので、一般的に点字ブロックと呼ばれています。正式には「視覚障害者誘導ブロック」といい、原則として日本工業規格（JIS）の定める形状となっています。色は弱視の人が見やすく、周りと区別がしやすい黄色とされています。



※ 従来、駅のホームには点状ブロックを設置していましたが、視覚障害者がひとたび方向を失うと、ホームの内側と外側が区別できずに誤って線路に転落するという危険性がありました。そのため、点状ブロックの内側に、安全側であることを示す1本線が追加された「内方線付き点状ブロック」に交換する駅が増えています。



点字ブロックの上に自転車や物などを置かないようにしてください。



点字ブロックの上やその周囲 30cm 以内に物が置かれていると、視覚障害のある人が転倒するなどしてとても危険です。点字ブロックの上やその周囲には絶対に物を置かないください。

もし、障害物に戸惑っている視覚障害者の方を見かけたら、声をかけて安全な場所まで誘導してください。

多機能トイレ

多機能トイレとは、車いす使用者が利用できる広さや手すりなどの設備に加えて、おむつ替えシートやオストメイト対応の設備などを設けることで、車いす使用者だけでなく、高齢者、障害者、子ども連れなど多様な人々が利用できるトイレのことです。



一般のトイレを利用できる人は、多機能トイレの長時間利用を控えましょう。



国の利用実態調査によると、車いす使用者の94%の方が多機能トイレで待たされた経験があると回答しています。「多くの人たちが使うようになって、しゅっちゅう待たされる」、「着替えをする人が長時間占用している」など、車いす使用者が使いづらい状況になっています。

設備を必要とする、さまざまな人がいらっしゃいます。お互いに思いやりの心を持って利用しましょう。

エスカレーター

エスカレーターを利用するとき、地域によって右側あけ、左側あけが慣例となっていますが、エスカレーターの安全基準は、ステップ上に立ち止まって利用することを前提にしています。近年、この慣例が危険を伴う行為であることが、少しずつ浸透してきています。

また、けがや病気などで片方の移動手すりにしかつかまることができない人もいます。



例えば、右手をけがしていて、左手でしか手すりにつかまれない人のことを考えてみましょう。その人はエスカレーターの左側にしか乗れませんが、左あけの慣習となっていたらとても不自由で危険です。

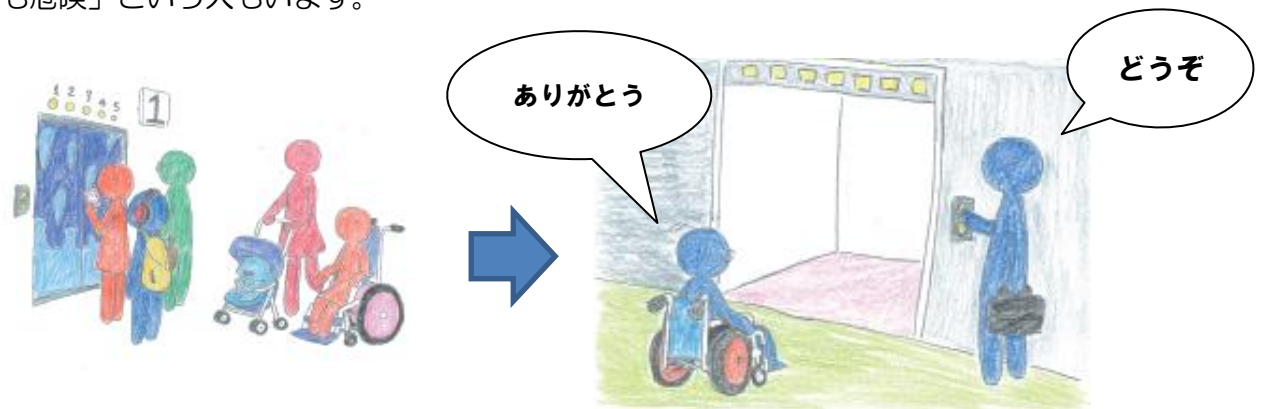


エスカレーターでは歩かないことを基本としましょう。

**右あけ、左あけの慣習について、障害者や高齢者の視点から考えてみましょう。
急ぐ場合は階段の利用をお願いします。**

エレベーター

エレベーターは、高齢者や障害者等にとっては、垂直に移動する際の大切な移動手段です。エレベーターを利用する人の中には「エレベーターを使うのが当たり前」「エレベーターの方が楽」という人がいる一方で、「エレベーターでないと移動できない」という人や「階段で移動することはとても危険」という人もいます。



「みんな」のためのエレベーターですが、周囲にも注意していただき、必要とされる人を優先しましょう。

エレベーターに乗り込む際、上のイラストのような場面のときには、必要とされる人を優先し、譲り合うようにしましょう。また、エレベーターなどで車いす利用者の手が届かないときには、「何階ですか」、「ボタンを押しましょうか」などと声をかけましょう。また、乗り降りする間、ドアを開けておきましょう。

まだまだある、まちのさまざまなバリアフリー

信号機

- ・視覚障害者用付加装置付信号
「音響押ボタン」を機能させると、歩行者用信号の表示を開始したこと、または表示を継続していることを知らせる擬音（「ピヨピヨ」または「カッコー」）やメロディを発します。
- ・高齢者等感應式信号
「青延長用押ボタン」等を押すと、歩行者横断時間の延長を行うことができます。

エスコートゾーン

- ・横断歩道の中央部に敷設した点字ブロック。視覚障害者が安全に車道を横断できる道筋を示したものです。

歩道の段差切下げ

- ・歩道面と車道面の高低差は原則5cmですが、横断歩道部分では歩道を切り下げ、車いすなどが通行しやすいようにしています。なお、視覚障害者が歩車道境界を認識できるように2cmの段差を残しています。



堺東駅南口交差点（市役所本庁舎前）には、これらの施設が整備されています。

ノンステップバス

- ・床面を超低床構造として車内の段差を少なくし、乗降ステップもなくしているので、高齢者等が容易に乗り降りできます。
補助スロープやニーリング装置（床面を更に下げる装置）により、車いすでの乗降もスムーズに行えます。



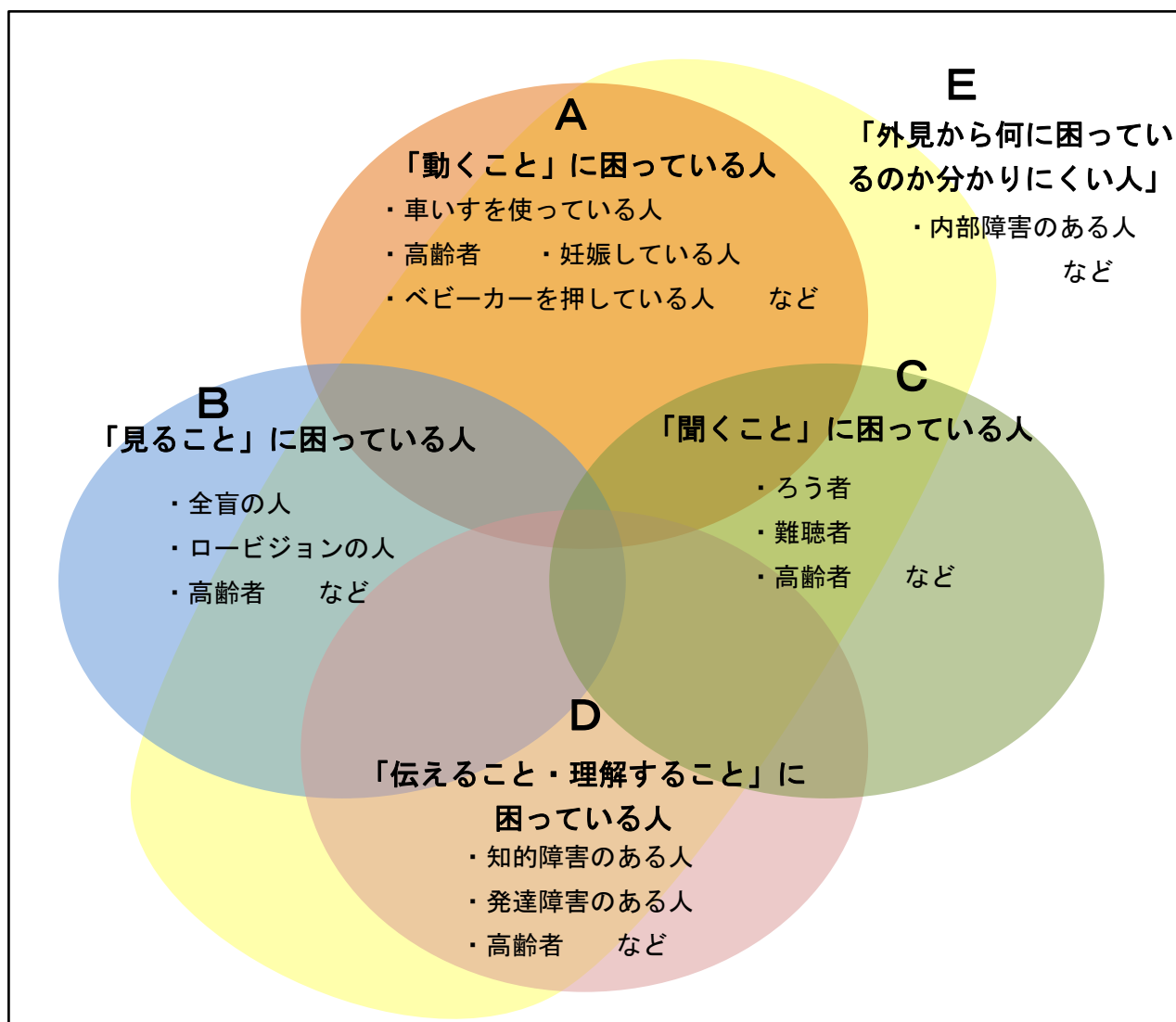
（出典：南海バス株式会社ホームページ）

ホームドア

- ・ホームからの転落や列車との接触事故等を防止する安全対策の一つとして、プラットホームを壁面で囲い、列車の乗降に合わせて開閉させるドアを取りつけたものをいいます。「フルスクリーンタイプ」や「可動式ホーム柵」、「ロープ式スクリーンドア」などのタイプがあります。

どのような「バリア」で困っているのでしょうか？

行動する際に発生しうる、さまざまな「困りごと」(イメージ)



多様な利用者に対する理解を

上のイメージ図に示すように、私たちの周りには障害者や高齢者、妊娠している人や子どもを連れている人など、多様な人が生活しています。

誰もがバリアを感じることなく、安心して自由に出かけられるようになるには、多くの利用者ニーズに対応することが、移動等の円滑化につながるようになります。施設の建築などハード面からのバリアフリーはこのような考え方で進められます。

しかし、それだけでは解決しないこともあります。

このハンドブックでは、まちの中での移動や施設を利用する際に発生しうる「困りごと」からみた、対象者の主な特性とそのお手伝いのポイントを示します。このことで障害者や高齢者をはじめとした、さまざまな人に対する「心のバリア」を解消するきっかけづくりとなれば幸いです。